

第4回 フクジュソウ

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦



正月を飾る植物はさまざまである。門松に用いられるマツやタケ、鏡餅にはダイダイが添えられ、7日になれば春の七草（セリ、ナズナ、ハハコグサ（ゴギョウ）、ハコベ、コオニタビラコ（ホトケノザ）、カブ、ダイコン）を七種粥とする。

今回は正月を彩る花としてキンポウゲ科のフクジュソウを採り上げたい。フクジュソウを正月の花とする歴史は古く、江戸時代中期の薬物書である『大和本草』には「福寿草」ふくじゅそう「元日草」がんじつそうの名で記載されている。ちなみに『大和本草』の著者は基礎的な養生書として現代でも読まれている『養生訓』を著した貝原益軒である。

正月の花のフクジュソウではあるが、江戸時代の正月は旧正月であるので、今日の正月にあわせて開花させるのは少々難しい。年末に鉢植えが出回っているのを見かけるが、ビニールハウスで気温などを調節して正月に花期を合わせているようである。いずれにしても、まだ他の草木が冬の眠りから覚めないころの寒々しい地面に咲く黄色い花は、一層鮮やかに映り早春を告げる花としてはこの上ない。まだ寒いうちはせっかく花を咲かせても、授粉をしてくれる虫も少ないわけだが、他の花も少ないので競争はゆるやかともいえる。他の植物と少し時期をずらす戦略をとる植物は比較的弱い植物に多い。フクジュソウは、春光にあわせるように次々と花を咲かせ、6月には早々と地上部を枯らせて休眠に入ってしまう。管理のしづらい植物ではあるが、育ててみると趣があるのではないだろうか。

薬用としてはヨーロッパにおいて強心薬とされていた。ジギタリスが強心作用を持つことがよく知られていることもあって、現代の感覚では心臓などの臓器の働きを調節する薬が伝統医学の中にあることに何の違和感も持たない。しかし、ヨーロッパの伝統医学は長きにわたって病気の原因を体液の異常に求める体液論の影響下にあったため、17世紀にデカルトが機械論を提唱した後も、医学が臓器や細胞の働きから疾病を見るようになるまでは紆余曲折を経なければならなかった事実がある。このような医学観の変化の中で、フクジュソウやジギタリスなどは強心薬として注目されるようになったのである。

フクジュソウには日本にもともと自生していたフクジュソウ *Adonis amurensis* と、明治時代にヨーロッパから導入されたセイヨウフクジュソウ *Adonis vernalis* があり、成分はシマリン、アドニトキシンなどを含んでいる。全草ぜんそうにこれらの成分を含んでいるので、栽培する場合は誤食に注意する必要がある。

フクジュソウの学名の「adonis」は、ギリシャ神話に登場するアドニスからきている。神話の中でアドニスは嫉妬の末に殺されてしまい、彼を愛していたアフロディーテは深い悲しみを抱く。「福寿」と春を祝う東洋とは全く反対の印象である。長く厳しい冬と暖かい春の狭間に咲くフクジュソウだからだろうか。フクジュソウの花期は4月ごろまで続く。ひとまずは、まばゆい黄花に心をあずけて暖かい春を待ちたい。